季　　刊

生活

第　4　号

Quarterly: SEIKATSU 4

Issue: Dialogue

生活工房
Lifestyle Design Center

ダイアローグ

2020　　1・2・3

東京という場所にとって、
大きな節目となる2020年が始まります。
生活工房では これまで"、
世田谷に身を置きながら、
遠くの土地と身近な場所、
過去の暮らしと今、そして未来とを
結びつけるような試みを行ってきました。
この冬から春に開催する
「東京スーダラ2019 希望のうたと舞いをつくる」、
「穴だかけ":an-archive 世田谷 クロニクル
1936-83」では、長い時間をかけて
多くの方と交し合った対話が
展覧会という形になって現れます。
対話することは違う景色をみること。
さまざまな対話が交わされた、
今号の「生活」をお楽しみください。

もくじ　Contents

03　インタビュー
小森はるか、瀬尾夏美、砂連尾理
Interview
Haruka Komori, Natsumi Seo, Osamu Jareo
08　打ちとけ花火
09　世田谷のおとなりさん④
“世田谷区宮坂のチアキさん”
10　生活工房のイベント　Event Guide
16　生活工房のご案内　Access Guide

cover painting: Natsumi Seo

第4号のテーマは、ダイアローグ

タイムラインを流れる無数のつぶやき。チャット形式で繰り返される
言葉のやりとり。端末には言葉が溢れ、対面せずとも
コミュニケーションが成り立つ一方で、人に会い、言葉を交わせば、
その表情や抑揚から言葉以上に想いが伝わることがあります。

東日本大震災の被災地での対話や変わりゆく風景を作品化した
映像作家の小森はるかさん、画家で作家の瀬尾夏美さん。
また2人とは異なるアプローチで被災者との対話を続けてきた
ダンサーの砂連尾理さん。

そして、この3人や協力者たちが交わしたいくつもの対話の上に
生まれた表現が並ぶ展覧会「東京スーダラ2019 ――
希望のうたと舞いをつくる」。この冊子では、展覧会の制作を進める
小森さん、瀬尾さん、砂連尾さんに話を聞きました。

そのほかに、P8〜9では、
世田谷区内のイラストレーターさんと区民の方が登場。
素敵な対話の時間をご紹介します。

あなたとご近所さんとの出会いが、
季刊生活から生まれますように。

小森×瀬尾×砂連尾インタビュー

震災、オリンピック、その先

東日本大震災の被災地との関わりが深い映像作家の小森はるかさん（写真中央）、
画家／作家の瀬尾夏美さん（写真右）、ダンサーの砂連尾理さん（写真左）と
ともにつくる展覧会「東京スーダラ2019 ── 希望のうたと舞いをつくる」。

東京オリンピックで震災の記憶がかき消されないように、
震災とオリンピックをつなぎ、そして未来への跳躍を企てる3人との対話です。

text and photo: 杉本勝彦

── 小森さんと瀬尾さんは東京藝術大学の同級生で、ともに大学院を出られていますが、それぞれ美術を志したきっかけから教えて下さい。

瀬尾　もともと絵を描くのが好きだったのですが、高校では写真表現に興味を持ち、主にポートレートを撮っていました。ポートレートは私と被写体の間にある表現だと考え、それからコミュニケーションの間に表現が生まれることに関心を持ちました。そして、絵や写真といったメディアを限定せずに、コンセプトそのものに向き合うことができる藝大の先端芸術表現科に進み、誰かと誰かの“間”の表現について考えながら制作をするようになりました。今、私が言葉を書く時も、私とあなたの間に言葉を置いていく作業をしているので、やっていることは大学時代と変わっていないと思っています。

小森　私は絵を描いたりする器用なタイプではなく、映画の制作に興味を持っていました。映画のような大人数で作り上げるものなら、自分のような平凡な人間でも何か制作に関われるのではないかと、ぼんやりと考えて（笑）。それで映画や映像を勉強できる先端芸術表現科へ入りました。私は大学と並行して映画美学校にも通っていて、そこでカメラを回したり、人の作品を手伝ったりする中で、自分で撮りたいという思いが強くなりましたね。それも演出したり脚本を書いたり、ゼロから作るということではなく、稽古をしている時間であったり何でもない時間を撮りたいと思うことがあって、フィクションよりもドキュメンタリー的な撮り方へと近づいていきました。ちょうど、その頃に東日本大震災が起こったという感じです。

瀬尾　2人で活動していくきっかけは偶然で、震災のボランティアに一緒に行ったことでした。震災の日の夜に絵を描いてみたのですが、手癖みたいな絵しか描けず、「これではだめだ、もう絵が描けない」と思ったんです。それなら今起きていることを自分で見ることから始めるしかないと思いこんでしまって。震災後の2〜3日でそういう思いが膨れ上がり、もうこれまでの日常ではなく、“以後”の世界だというのを強く感じていました。ここから始めなければいけないし、これを無視したくない。それでボランティアなら被災地へ行けるだろうと思い、レンタカーを借りて行くことに決めました。

小森　瀬尾がボランティアに行くと言い始めると、まだ行かない方がいいという友人もいたのですが、私はすぐそれにノリました。それから行く方法を調べ、最初は茨城に行くことにしたのですが、地元の方にもっと北の地域に行ってほしいと言われ、段々と北上して青森まで行きました。

瀬尾　でも、いざ現地に行ってみたら、実際に瓦礫の撤去のような力仕事ができるわけでもない。そんな私たちを見かねて、被災したお宅の人が声をかけてくれて、いろんな話をしてくれました。たとえば、何もないところでどうやって弔いをするかとか、境遇の違う他者とともに生きる方法とか、2人で聞いているだけではあまりにもったいないような話なんです。だから、それを伝える方法を考えなければと思いました。また、ボランティアの道中では、被災した人たちに、美大生なら写真を撮ってと言われたり、現地の話を誰かに伝えてほしいと言われたり、そういう経験を通して、自分たちのやれそうなこと、やったほうがよさそうなことがわかってきました。それは、これまで学んできたアートとそう遠くない何か、むしろそのものかもしれない、ということは掴んでいた気がします。

小森　2回目に岩手県陸前高田へ行った時に、瀬尾が引っ越したいと話していて。私はすぐには引っ越そうとは思っていなかったのですが、通っているうちに、通っているだけじゃ見落としているものがある気がしましたし、沿岸部は1日1日の変化があまりにも大きくて。東京で被災地の報告会をしたりもしているけど、何が伝えられているのかを考えてもいました。それから私もだんだん住みたいという思いになっていきました。

── その後、2012年4月に陸前高田に隣接する町に越され、被災地で暮らしながら制作を行い、共作の巡回展『波のした、土のうえ』※1や小森さんのドキュメンタリー『息の跡』※2、そして瀬尾さんの単著『あわいゆくころ』※3などが発表されています。被災地での活動を通じて生まれた作品に通底する手法のひとつは対話だと思います。

瀬尾　被災地は、見渡す限り荒野になってしまっているわけですから、それを見て暮らす町の人は、震災の日のことやかつてのことを、常に思い出さざるを得なかったし、それにともなっていま感じていることを誰かに語りたい、語らざるを得なかったと思うんです。だから私たちはその状況に居合わせて、ただ聞いていたという感じでした。

小森　居合わせるという話に近いのですが、私は陸前高田の蕎麦屋でアルバイトをしていて、一緒に働いている人やお客さんの話をたくさん聞かせてもらいました。どんな人が亡くなって、どんな風景があって、自分が出会えなかった、見られなかったものを話してくれていました。それは自分がカメラを構えていたら聞けない話で、カメラを向けたら話す場自体が消えてしまうような空間でした。それから撮りたいと思う人との出会いがあって、その人に同行して撮影することが始まりました。瀬尾と一緒の場合は、瀬尾が話を聞く場に私もいて、その人の表情や歩いている姿を撮りますが、会話が進行していく状況に自分のカメラを追いつかせたり、呼吸を合わせたりするのが難しいと思いながらやっていましたね。

砂連尾　2017年に2人に誘われて陸前高田に行ったのですが、そこで私が感じたことは、2人は誰と接していてもこちらが聞き耳をたてないといけないくらい声が小さいのだけれど、そこで暮らす人々に丁寧に寄り添っていて、その寄り添い方が自然なため、彼らが安心して2人には色々なことを話せたのだと思えたんです。そんな被災地の方の心の奥底に閉じ込めていた言葉にならない気持ちを瀬尾さんが文章に書き起こし、またややもすると見落としてしまいそうな些細な出来事や表情を小森さんが映像として切

※1　巡回展『波のした、土のうえ』↑（2014）　小森＋瀬尾が陸前高田市で2011年から3年半かけて行った制作の集大成的な展示。文章、スケッチ、絵画、写真などの平面作品と、地元住民と協働した映像作品とで構成。全国10ヶ所へ巡回された。

※2　息の跡（2016）　小森の長編ドキュメンタリー作品。陸前高田の種苗店「佐藤たね屋」を営む傍ら、津波の経験とその後の生活などを独習した外国語で書き続ける店主・佐藤貞一さんを追った。

※3　あわいゆくころ　陸前高田、震災後を生きる（2019）　自身のツイートやエッセイ、絵物語を収録した瀬尾の単著。震災から復興へと移り変わる被災地とともに歩んだ瀬尾による7年間の記録。晶文社刊。

展覧会をサポートするリサーチメンバーによる読書会の様子

り取っていったことが彼らとの信頼関係を確かなものにしていったのだと思いますね。

瀬尾　私たちは外部の人間だからこそなれる回路でありたいと考えていたので、そのコミュニティのプレイヤーにならないことは、対話の手法のひとつだったと思います。東京でも関西でもどこでも同じように、こういう対話が起こるような場面をたくさんつくることが重要だとも思いますし、今もそれを実践しているという意識がありますね。

――3人は砂連尾さんの作品『猿とモルターレ』※4での協働を経て、今回の展覧会に至りますが、震災、東京オリンピック、そして未来に目を向け制作が続いています。1964年の東京オリンピックの前に植木等が歌いヒットした『スーダラ節』※5もキーワードになっていますね。

砂連尾　私が避難所で取材した人たちが一様に語っていたのが、あんなことは2度と嫌だけど、震災を経験したことで生きることを改めて問い直せたということ。その想いは被災地以外の私たちも同じだったのですが、東京オリンピックでその問い直しが忘れ去られてしまうのではないかと危惧しています。2人と展覧会の打ち合わせをしながら、オリンピックの狂騒によって震災で体験したことやそこで得た知恵が財産として継承されないのは残念だという話をしました。だから、昨年の春から東京暮らしではありますが、それまで関西で活動してきた私や今もなお仙台を拠点に活動する瀬尾さん、小森さんは、東京ではある意味よそ者なので、東京で語りかけたり、対話したりすることには意味があるかもしれません。震災を機に戦後の制度設計の見直しが模索されていますが、未だ収束していない原発のように大きな社会的問題を抱えているにも関わらず、それを覆い隠すようにオリンピックがやってくる。そういう状況下で、抱えきれない問題や不安をみんなで分有していくことが希望になるのではないかと思うんです。今回スーダラ節とその歌い手である植木等を2人に提案しましたが、“豊かさ＝お金”という戦後高度成長期に、植木がそこから一定の距離を置いて“無責任”のような役柄を演じたことで果たした役割があったのならば、そのユーモアや軽さが現代に必要なんじゃないかと思ったんです。

瀬尾　陸前高田の状況が落ち着いてきて、私たちなりに外へ出る準備ができたら、いつの間にか日本は震災後から東京オリンピック前というムードになっていました。私たちは震災からオリンピックへどのように移行してしまったのか。もし断絶しているなら何か大切な記憶を喪失しているのではないか。ふたつの間の時間を丁寧につなぎ直すことで、巨大な祝祭のその先を生き抜くための物語が紡げるのではと思ったんです。砂連尾さんはよく跳躍という言葉を使われますが、巨大な祝祭を飛び越えて、それでも地続きに生きていくために必要なものは、その物語に触れたひとりひとりの身体がふっと生みだしてしまう歌や踊りのようなものなのではという予感がありました。植木等は戦争へ行かなかったのですが、戦後、戦争当事者ではないと自認していた人たちは自身のトラウマを語れなかったのではないかと思ったんですね。その時に植木自身が戦争当事者とは違う立場で、その出来事を踏まえながら「スーダラ節」のような態度を引き受けたというのは象徴的なことではないかなと。戦後の流れ、当事者とそうではないと自認していた当事者のあり方、東京という場所、そうした要素が震災後の現在と重なり、展覧会のタイトルに東京スーダラとつけました。

砂連尾　歌や踊りで共有することの強度に賭けたくなるというか。言葉というメディアが相互理解とは裏腹に世界を分断したり、時に権力闘争を生んでいる中で、もしかしたら歌や踊りは関係性を解かしていくというか、つながりというと安易かもしれませんが、そういうところへ軽やかに跳躍できるのではないかと思っています。

（2019年10月6日、生活工房にて）

※4　猿とモルターレ（2013/2015/2017）　砂連尾のパフォーマンス作品。交流した被災地の人々の言葉や身体に触発されて制作された。2013年北九州、2015年仙台、2017年大阪で上演。大阪公演に小森と瀬尾も参加。

※5　スーダラ節（1961）　植木等がメンバーだった「ハナ肇とクレージーキャッツ」による昭和のヒット曲。「分かっちゃいるけどやめられねぇ」というフレーズでおなじみ。

展覧会情報

“震災後”を生きていると思っていた私たちは、いつの間にか“オリンピック前”を生きていた。本展は未曾有の災厄と巨大な祝祭という2つの事象の狭間において、混迷の21世紀をしなやかに生き抜くための技術やユーモア、身体性について考える展覧会です。オリンピック目前の2019年、東京で暮らす平成生まれのリサーチメンバーは自身の生活実感に関わるテーマとして「震災」「家」「友だち」「老い」をそれぞれ選び、いくつかの対話をつづける過程で、互いに通底する感覚や問題に気づいてゆきます。現代の一端をなぞるような対話の軌跡を反芻し8年余りの時間を辿りながら、3人のアーティストが祝祭の後も地続きにあるはずの“未来”を主体的に創造していくための言葉・映像・ダンス作品を発表します。

●東京スーダラ2019――希望のうたと舞いをつくる

1.25（sat）～2.16（sun）　10:00～18:00（金曜のみ20:00まで）
入場無料　月曜休み　会場：ワークショップルームB、生活工房ギャラリー

We considered ourselves as living in the “post-Great East Japan Earthquake” period, but before we knew it, we were in the “pre-Olympic” period. This exhibition examines the techniques, humor, and physical well being for flexibly adapting to and surviving the chaotic 21st century in between two events: an unprecedented natural disaster and a major festivity. In 2019, in the lead-up to the 2020 Olympic Games, research members who were born in the Heisei period (in or after 1989) and are living in Tokyo held dialogues with other residents in the city. In the course of discussing themes related to their daily lives that were selected by the members, namely, “Great East Japan Earthquake,” “home,” “friends,” and “aging,” the members found common perceptions and issues. By contemplating and thinking over these dialogues that trace the course of where we are today, spanning a period of over eight years, three artists present poetry, video, and dance works in order to proactively create a future continuing beyond the Olympic Games.

小森はるか（こもり はるか）
映像作家。1989年静岡県生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻、映画美学校修了。

Haruka Komori
Filmmaker. Born in 1989 in Shizuoka. Graduated from the Program of Inter-Media Art, Graduate School of Fine Arts, Tokyo University of the Arts and the Film School of Tokyo.

瀬尾夏美（せお なつみ）
画家・作家。1988年東京都生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻修了。

Natsumi Seo
Painter and writer. Born in 1988 in Tokyo. Graduated from the Program of Painting, Graduate School of Fine Arts, Tokyo University of the Arts.

砂連尾理（じゃれお おさむ）
振付家・ダンサー。1965年大阪生まれ。立教大学現代心理学部映像身体学科特任教授。

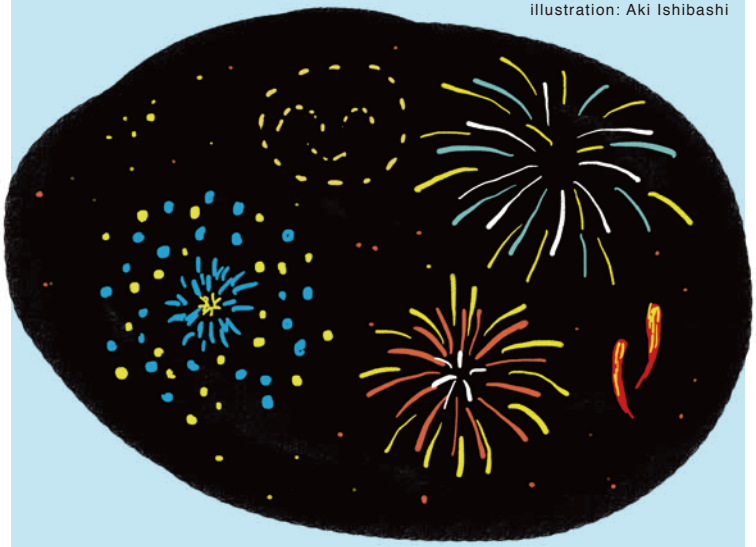
Osamu Jareo
Choreographer and dancer. Born in 1965 in Osaka. Specially Appointed Professor with the Department of Body Expression and Cinematic Arts, College of Contemporary Psychology, Rikkyo University.

世田谷にゆかりのある作家が特集テーマにまつわる物語を綴ります。

コラム　打ちとけ花火

世田谷区在住のイラストレーター
Akiさん は
世田谷区たまがわ花火大会の会場で
外国人観光客と出会いました。
彼との交流から生まれた対話の物語です。

illustration: Aki Ishibashi



数年前のたまがわ花火大会、1人旅行に来ていた外国人に声をかけ一緒に花火をみた。拙い英語が爆発音でかき消され、私たちと彼との距離がその綺麗な花火でギュッと近くなったのを鮮明に覚えている。
2019年の夏、知人と沖縄旅行に出かけたとき、ふとその出来事を思い出して1人で食事をしていた旅行中の外国人を輪に入れた。私たちはとても仲良くなり、それから東京での再会も果たした。一緒にいた知人はその後海外へ彼に会いに行くほどの仲になった。
多摩川の空に打ち上がった花火の輪が、言葉の壁を越えて世界へ広がっていくのを感じた体験だった。

Aki Ishibashi
日常に溢れる物事をユニークな世界観におきかえ、SNSを中心に人気を集める。デザインやワークショップ、オリジナルブランド“PARCY”の展開、アパレルブランドとのコラボや雑誌・広告のアートワークなど幅広く活躍中。
https://akiishibashi.com/

「おにぎり」を手がかりにして、区内に住む人々を訪ねていきます。

連載コラム　世田谷のおとなりさん④

チアキさん
ある日のおにぎり

世田谷区宮坂にお住まいのチアキさんは、アパレル販売員として都内のお店で働いています。日々、多くのお客さんと向き合い、洋服の話からプライベートなことまでお話しするそうです。
おにぎり・たくわん・みそ汁の組み合わせ。この日は、幼い時から好きだという3点セットをつくりながら、チアキさんの日常について伺いました。ちなみにたくわんは大好きな食べものだそう。
チアキさんは、2019年からボランティアスタッフとして都内の美術館でギャラリートークに挑戦しています。休日は現代美術の勉強や研修と、忙しい毎日です。「現代美術は、社会に埋もれた様々な事柄をアートという形で表現…そう、表に出しているところが魅力なんです」と嬉しそうに話してくれました。ボランティアガイドは鑑賞者と作品の中間、販売員は買い手と洋服の中間にいる立場だと捉えています。
「私のひと言で、いままで内心に留めていたことをおはなししていいんだと気づいたり。例えば試着室の中やギャラリートークの輪の中だけでも素直な感想が話せる場になったら、面白いかなって思っています」。私たちはもしかしたら何気なく、誰かとプライベートなことや社会の話題を共有していたのかもしれません。場所や方法は違ってもチアキさんの周りには人が集い、語らうような空気感が漂っていました。

〈つくり方〉
鮭チーズのおにぎりは、
あたたかいごはんに
鮭フレーク、ごま、醤油の順番で
入れて混ぜ合わせます。
最後にチーズをいれて軽く混ぜたら
ラップのうえにのせてにぎります。

すじこのおにぎりは、あたたかい
ごはんの中心にすじこを入れて
にぎります。おにぎりの表面に
塩をふったらのりをまきます。

炊き立てのごはんは
チーズが溶けてしまうので、
適度にあたたかいごはんで

photo: 河内瑠璃

〈丸山さんのレシピ〉
・お米・・・1合

鮭チーズのおにぎり
・鮭フレーク・・・大さじ2
・醤油・・・大さじ1/2
・ごま・・・大さじ1
・プロセスチーズ
（さいの目切り）・・・30g

すじこのおにぎり
・すじこ・・・5g
・のり・・・1枚
・塩・・・少々

ワークショップ／セミナーの申込方法

●生活工房ホームページ：各プログラムページの申込フォームからどうぞ↓
●電話：03-5432-1543
●往復ハガキ：希望イベント名・希望日時・住所・
氏名（ふりがな）・電話番号を明記の上、下記宛先まで
154-0004 世田谷区太子堂4-1-1キャロットタワー 生活工房宛

Exhibition

プレーバック、プレーパーク！

遊び場をめぐる冒険

2019.12.14（sat）～1.19（sun）9:00～21:00　入場無料
月曜休み（祝日はのぞく）および年末年始休館（12.29～1.3）
会場：生活工房ギャラリー

特別協力：認定NPO法人プレーパークせたがや

1979年、羽根木公園の一画に誕生した子どものための遊び場「プレーパーク」。本展では、羽根木プレーパークの成り立ちを映像作品や資料とともに紐解きます。

トークイベント
「4つのプレーパーク誕生秘話　世田谷の市民運動とそれぞれの時代」

1.9（thu）19:00～21:00　会場：ワークショップルームA

遊び場の環境をつくる初の常駐プレーリーダー天野秀昭さんが、区内4つのプレーパーク誕生までの歩みを語ります。

講師：天野秀昭（日本初のプレーリーダー）
参加費：無料／40名（先着）　申込：不要、直接会場へ

Play Back, Playpark!

An Adventure Around Playgrounds

Admission Free　Closed on Mondays (exceptions: Jan.13) , Dec.29 – Jan.3
Venue:Seikatsu-Kobo Gallery

In 1979, “Playpark”, a play area for children, opened in the corner of Hanegi Park. This exhibition unravels the origin of Hanegi Playpark through videos and other materials.

1977年頃の桜丘冒険遊び場
©認定NPO法人プレーパークせたがや

Sakuragaoka Playpark in around 1977
©PlayPark Setagaya, NPO

連携イベント
世田谷区プレーパーク事業40周年記念シンポジウム
「もっと広がれ！外遊び∞」

1.11（sat）10:00～12:30　会場：セミナールームA・B

プレーパーク40周年記念。
遊び場づくりに取り組む関係者によるシンポジウムです。

主催：世田谷区、認定NPO法人プレーパークせたがや
参加費：無料／90名
申込：プレーパークせたがやのホームページhttp://playpark.jp/よりご確認ください。

Exhibition

東京スーダラ2019

希望のうたと舞いをつくる

1.25（sat）～2.16（sun）10:00～18:00（金曜のみ20:00まで）
入場無料　月曜休み
会場：ワークショップルームB、生活工房ギャラリー

アーティストと市民メンバーが、“震災後オリンピック前”という時間の中に生きる都市の人々の声を採集し、制作した言葉・映像・ダンス作品を展示します。

企画制作：小森はるか、瀬尾夏美、砂連尾理

❶ダンスパフォーマンス&アフタートーク

1.26（sun）・2.2（sun）いずれも19:00～21:00
会場：ワークショップルームB

「震災」「家」「友だち」「老い」をテーマにした対話から生まれたダンス作品を上演します。両日アフタートークも行います。

出演：市民メンバー ほか　振付：砂連尾理
参加費：2,000円／40名（先着）
申込：12月25日10:00より電話かHP（P10参照）にて

photo: Haruka Komori

❷ギャラリーツアー＆レクチャー
「いま、希望のうたと舞いとは何か?」

2.9（sun）14:00～16:30
会場：ワークショップルームA・B、生活工房ギャラリー

制作に至る経緯や、2019年を通して行ったリサーチ・ワークショップの解説と本展のギャラリーツアーを行います。

講師：小森はるか、瀬尾夏美、砂連尾理 ほか
参加費：500円／50名（先着）
申込：12月25日10:00より電話かHP（P10参照）にて

Tokyo Sudara 2019

Production of Songs and Dances of Hope

Admission Free
Closed on Mondays
Venue: Workshop Room B, Seikatsu-Kobo Gallery

This exhibition displays text, video, and dance works produced by artists and local research members, based on the comments and opinions collected from people in Tokyo living in the “post-Great East Japan Earthquake and pre-Olympic Game” period.

drawing: Natsumi Seo

Seminar

哲学対話　PARA SHIF（パラ シフ）

哲学者と日常の中にある身近なテーマについて対話しながら、
普段当たり前と思っている考え方をガラリと変えるパラダイムシフトが
起こることを目指します。

※YouTube上で一部公開することを前提に両日撮影が入ります。

❶「やる気と元気」

2.15 (sat) 18:30 ～ 21:30
会場：Cafe Mame-Hico 三軒茶屋店
（東京都世田谷区太子堂4-20-4）

社会で常に求められる2つの通念。
主体性、意志、健康の言葉を
手掛かりに、より良く生きることを
考えます。

photo: Takashi Arai

❷「作品と広告」

2.22 (sat) 18:30 ～ 21:30

昨今、炎上により私たちから遠ざかる「作品」と浴びるように受け取る
「広告」。その違いを見極め鑑賞の意義を問います。

講師：福尾匠（哲学者・批評家）
対象：18歳以上
参加費：各日4,000円（コーヒー・
ケーキ付）／20名（抽選）
申込：1月27日（必着）までにHP
（P10参照）にて

Cafe Mame-Hico Sangenjaya

Philosophy Dialogue　PARA SHIF

Venue: Cafe Mame-Hico sangenjaya

Dialogues are held with a philosopher
on familiar themes from daily life.
In the course of these dialogues,
we aim to make a paradigm shift that
fundamentally changes concepts and
notions previously considered common.

Seminar

NPO・市民活動のためのステップ・アップ講座

組織づくりのためのヒント／コツを学ぼう!!〈広報編〉

2.4 (tue)・12 (wed) 19:00 ～ 21:30　会場：セミナールームA・B

NPO・市民活動を支援する講座です。
前回に引き続き「広報」をテーマに開催。第一線で活躍中の専門家を
お招きして、より効果的なアプローチ方法を学びます。

企画進行：株式会社世田谷社

講師：こくぼひろし（ひとしずく株式会社代表）
対象：NPO法人・市民活動団体のスタッフや役員、その他関心のある方
参加費：各回1,000円（1団体から複数名参加の場合、2人目から半額）
／24名（先着）　申込：12月25日10:00より電話かHP（P10参照、
団体名もお知らせください。）にて

※各回の詳細は2019年12月中旬に生活工房ホームページでお知らせします。

Step-Up Course for NPO and Citizen Activities

Learn the hints and tricks for creating an organization!! 〈Publicity Edition〉

Venue: Seminar Room A・B

Course for supporting NPO and citizen activities. We will continue the theme of “publicity” from the previous course, learning effective approaches and methods by inviting experts working on the front line.

Exhibition

穴アーカイブ：an-archive

世田谷クロニクル1936-83

3.14 (sat) ～ 4.5 (sun) 10:00 ～ 18:00（金曜のみ20:00まで）
入場無料　月曜休み
会場：ワークショップルームA・B、生活工房ギャラリー

区内の一般家庭に眠る8ミリフィルムの保存・公開を行う「穴アーカイブ」。
これまでに集まった84巻の映像と人々の語りを通して、昭和の世田谷を
描き直す展覧会。

企画制作：remo［NPO法人記録と表現とメディアのための組織］

トークイベント「思い出を食べる」（仮題）

3.22 (sun) 13:00 ～ 15:30
会場：セミナールームA・B

3.11直後の食べ物の記録「はじまりのごはん」企画者、
戦争を生きた女性の声を編み直した『戦争とおはぎとグリンピース』
編集者をゲストに迎え、食と記録を考えます。

講師：佐藤正実（3.11オモイデアーカイブ）、末崎光裕（西日本新聞社）、
松本篤（本展企画者／remo）　参加費：1,000円／50名（先着）
申込：1月25日10:00より電話かHP（P10参照）にて

※詳細は1月下旬に生活工房ホームページでお知らせします。

An-archive

Setagaya Chronicle 1936-83

Admission Free　Closed on Mondays
Venue: Workshop Room A・B, Seikatsu-Kobo Gallery

An-archive is a project that archives and shows 8 mm films found in Setagaya homes. This exhibition recreates life in Setagaya during the Showa period through the 84 films which have been collected and the stories of the people.

『駒澤オリンピック公園にて』
（昭和39年10月12日／
駒沢オリンピック公園）

At Komazawa Olympic Park
October 12, 1964
Komazawa Olympic Park
(Tokyo, Setagaya)

Event

第28回 国際交流 IN せたがや2020

2.22 (sat) 13:00 ～ 15:45
会場：ワークショップルームA・B

在日外国人との文化交流会を開催。アトラクションやお茶・
和服着付けなどを体験しながら互いの理解を深めます。
各国大使館の展示ブースなども楽しめます。

共催：世田谷海外研修者の会　参加費：1,000円（飲み物・菓子付）
申込：2月15日までに世田谷海外研修者の会・津森（TEL／FAX
03-3324-1408）へ

28th International Exchange in Setagaya 2020

Venue: Workshop Room A・B

We will hold a cultural exchange event with foreign nationals in Japan. This event will deepen each other's understanding of cultures through attractions and workshops, including Japanese tea and kimono fitting. Embassies will also have display booths.

Seminar

イシス編集学校×生活工房　情報編集力連続講座

新しい時代を楽しむ「自分らしさ」の編集術

①2.16(sun) ②2.23(sun) ③3.8(sun) 3日間完結　14:00～17:00
会場：①②セミナールームA・B　③イシス編集学校「本楼(ほんろう)(世田谷区赤堤)」

「情報」を自分自身で収集して、その時代らしい見方や思考方法を体験。情報を組み合わせ、自分らしさや相手に伝わる表現といった「編集力」の向上を試みます。

共催：イシス編集学校　参加費：全3回5,000円／40名（先着）
申込：1月7日10:00より電話かHP（P10参照）にて

ISIS Edit School and Lifestyle Design Center
Continuous Course on Information Editing Skills

Editing techniques for expressing yourself to enjoy the new era

Venue: Seminar Room A・B, ISIS Edit School

You will collect information on your own and learn how to process and conceptualize this information in a way that is suited with the times. This course seeks to improve your editing techniques, including methods for combining information and expressing it in a way which conveys a sense of yourself or is understandable to others.

イシス編集学校「本楼」
"Honro," ISIS Edit School

Seminar

朗読講座 豊かなことばの世界

❶水曜講座（午前・午後）〈名作を読む〉
1.29（wed）・2.5（wed）・12（wed）・19（wed）
各回10:30～12:30 ／13:30～15:30
講師：岩井正（NHK日本語センター）　作品：川上弘美著『運命の恋人』

❷木曜講座（午後）〈はじめての朗読〉
1.30（thu）・2.6（thu）・13（thu）・20（thu）　各回13:30～15:30
講師：秋山隆(NHK日本語センター)　作品：宮沢賢治著『なめとこ山の熊』

❸金曜講座（午後）〈はじめての朗読〉
1.31（fri）・2.7（fri）・14（fri）・21（fri）　各回13:30～15:30
講師：金野正人（NHK日本語センター）
作品：内館牧子著『十二単衣を着た悪魔』

会場：セミナールームA

ことばの持つ豊さ、力、輝きを「朗読」を通して体感します。
NHK日本語センターアナウンサーが講師となり、声の出し方、読み方などを丁寧に指導します。

受講料(4回分)：一般20,800円、せたがやアーツカード会員18,800円／各クラス15名（申込先着）　※消費税の改定に伴い受講料を改定しました。応募者僅少のため、閉講になる場合があります。　問・申込：(一財)NHK放送研修センター
TEL 03-3415-7121（受付時間9:00～18:00）　HP http://www.nhk-cti.jp/

関連プログラム「豊かなことばの世界　朗読発表会」
3.1（sun）13:30～16:00　会場：セミナールームA・B
朗読講座受講生による公開発表会。ことばが開く豊かな時間を体感してください。
参加費：無料／ 50名（先着、途中入退場可）　申込：不要、直接会場へ

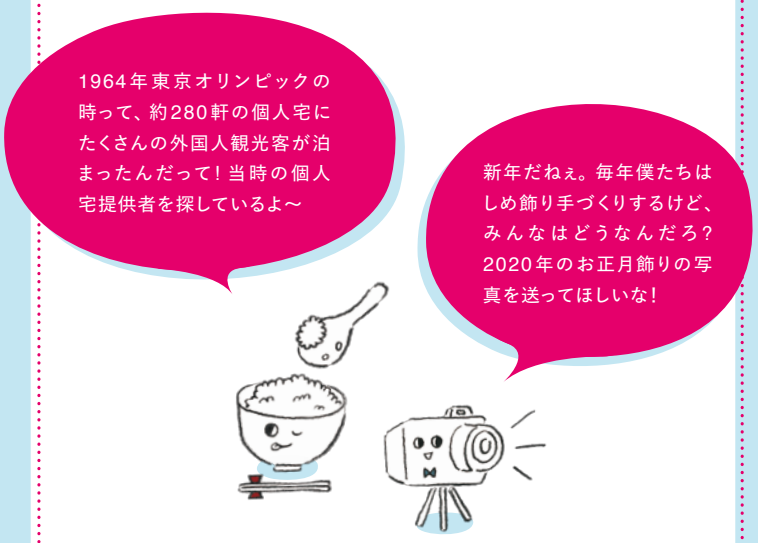
Recitation Course: A World of Abundant Words

❶Wednesday Course (morning – afternoon): Reading masterpieces
❷Thursday Course (afternoon): Beginners recitation
❸Friday Course (afternoon): Beginners recitation
Venue: Seminar Room A

おたずね工房

〈生活工房スタッフからの回覧板〉

計画中の展覧会やイベントに情報提供いただける方を探しています。
ご協力内容の詳細は、電話・返信でお伝えします。
ぜひ、お気軽にご連絡ください。



ご連絡先
メール info@setagaya-ldc.net
電話 03-5432-1543

クラシー（右）　カワルン（左）
生活工房ワークショップルームA・コミュニティキッチンをねぐらに、生活工房内をただよいながら探検している妖精。おもしろそうなイベントがあると、ふわふわと姿をあらわします。
illustration: にしぼりみほこ

季刊生活とは

もし、みえない誰かの生活と、ここで偶然出合ったら、
そこから、何が読めるでしょうか？
何もないようで、いつも何かが起きている
季刊生活はあなたと誰かの日常を、
行ったり来たりする回覧板です。

If you happen to encounter the unseen life of another,
what, then, would you discover?
It may feel like nothing,
but something is always happening.
Seikatsu Quarterly is like a bulletin board,
traveling back and forth between your daily lives.

季刊生活
第４号

発行日：2019年12月15日
編集：生活工房 石山那緒子
編集協力：杉本勝彦
デザイン・編集協力：牧寿次郎
翻訳：株式会社インターブックス
印刷：三永印刷株式会社
発行：公益財団法人せたがや文化財団　生活工房

Quarterly:
SEIKATSU 4

Issue date: December 15, 2019
Editor: Lifestyle Design Center Naoko Ishiyama
Editing Cooperation: Katsuhiko Sugimoto
Design, Editing Cooperation: Jujiro Maki
Translation: Interbooks Co., Ltd.
Printing: SANEI PRINTERY CO., LTD.
Issued by Lifestyle Design Center, Setagaya Arts Foundation

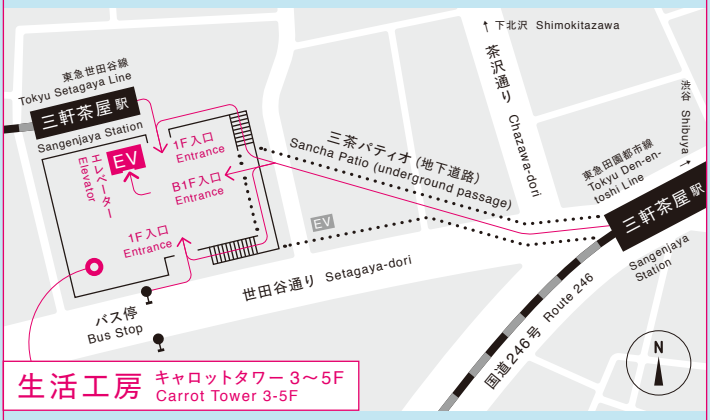
生活工房のご案内

生活工房は
世田谷区が設置したユニークな文化施設です。
デザイン、文化、環境などをテーマに、
展示やイベントを開催しています。

また、コミュニティ・キッチンをはじめ、
展示、ワークショップ、セミナー、ミーティングなどに利用できる
部屋の貸出を行っています。

The Lifestyle Design Center is
a unique cultural facility established by Setagaya city.
Exhibits and events are held on themes of design, culture, environment, etc.

We have a community kitchen and rooms for exhibits, workshops,
seminars, and meetings available to rent.

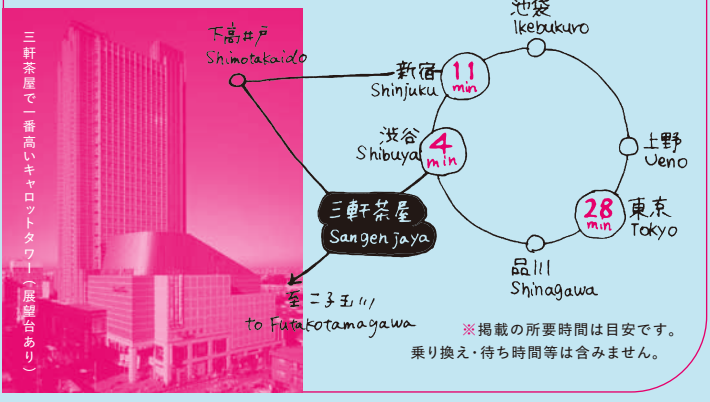


アクセス

- 東急田園都市線「三軒茶屋」駅 三茶パティオ口 徒歩5分
  地下通路より1F入口またはB1F入口（東急ストア入口の右隣）に
  入り、キャロットタワー内のエレベーターをご利用ください。
- 東急世田谷線「三軒茶屋」駅直結
- 東急・小田急バス「三軒茶屋」停留所そば

Access

- Tokyu Den-en-toshi Line: 5-minute walk from the Sancha Patio exit at Sangenjaya Station
  Subway passage: 1F or B1F entrance, take the elevator inside Carrot Tower
- Tokyu Setagaya Line: Directly connected to the Sangenjaya Station
- Tokyu Bus, Odakyu Bus: Located near the Sangenjaya Station stop



お問い合わせ　（公財）せたがや文化財団
世田谷文化生活情報センター

生活工房

〒154-0004 東京都世田谷区太子堂4-1-1 キャロットタワー
Tel. 03-5432-1543　Fax. 03-5432-1559
Mail. info@setagaya-ldc.net

Contact　Lifestyle Design Center

Carrot Tower, 4-1-1 Taishido,
Setagaya-ku, Tokyo, 154-0004

Setagaya Arts Center
Setagaya Arts Foundation

https://www.setagaya-ldc.net